

トピック情報

● 維管束植物

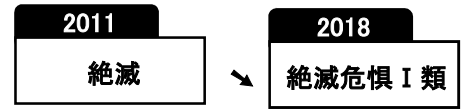
オナモミ



宇都宮市産

オナモミは、1949年頃に外来種オオオナモミが県内に侵入するまでは、各地に古くから生育していたと考えられている。しかし近年、本種も対象とした全県の調査が何度か行われたが、標本等による確実な情報は得られてこなかった。今回の改定では、2011年のリストで根拠とした直近の情報（1957年（宇都宮市）および1967年（鹿沼市）に採集された標本）から約50年経過していることもふまえ、カテゴリーを絶滅とした。

ホンゴウソウ

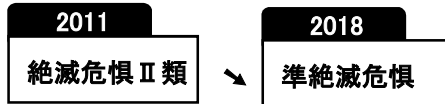


佐野市
撮影：則行 雅臣

7～8月、高さ3～13cm、太さ0.5mm以下の細い地上茎を出し、県内では9～10月頃上部に紫紅色の花を穂状に付ける。多年生の腐生植物である。

日本のほか、ベトナム、タイ、フィリピンなどに分布する。国内では、本州、四国、九州、沖縄に記録がある。栃木県では、1938年に茂木町小貫で採集されて以来、絶滅したと考えられていたが、2013年に佐野市栃本で約80年ぶりに再発見され、さらに、2015年に最初の確認地である茂木町小貫でも再発見された。

ギンラン

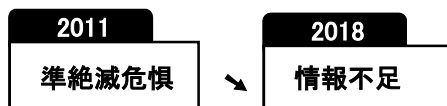


那須塩原市
撮影：星 直斗

ギンランは、県内では低地～山地に分布し、主にコナラを主体とする雑木林等の落葉広葉樹林内や、その林縁等の半日陰に生育する。雑木林の伐採や管理放棄、園芸採取等によって減少していたが、近年の調査によって個体数が増加傾向にあることが明らかとなった。公的な森林整備に伴う雑木林等の手入れによって、不要木の除去、やぶの刈り払い等が行われ、林内の光環境が好転したことが一因と推察される。このためCランクにランクを下げた。

● 蘚苔類

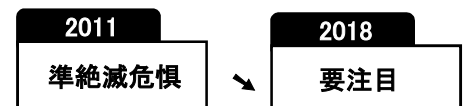
ウキゴケ



大田原市
撮影：富永 孝昭

本種は、環境省版レッドデータブックの第4次改訂において指定が解除された。全国の低地に広く生育することが明らかになったためだが、ウキゴケには複数種が含まれている可能性があり、県版レッドリストでは湧水域の水面に浮遊して生育する生活型を対象に指定した。未だ確認はされていないが、アクアリウム用に栽培されたものが逸出（あるいは故意に投棄）、繁殖する可能性があり、注意が必要である。

クマノゴケ

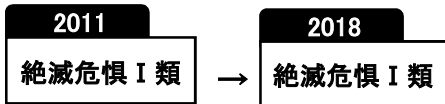


矢板市
撮影：富永 孝昭

本種は溪流の水しぶきのかかるような岩上に付着して生育する蘚類であり、2005年県版レッドデータブック指定時は那須地域で確認されるだけであった。その後の調査で高原山地域では極めてふつうで、那須地域にも多く、県央低山の古賀志山、足尾山地にも見つかった。砂防ダム建設などの環境変化が脅威であるが、絶滅の危険は低いと考えられ、要注目種とした。

藻類

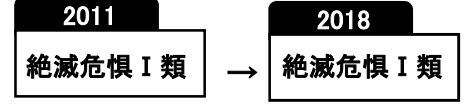
イシカワモズク



宇都宮市
撮影：富永 孝昭

本種はこれまで佐野市と日光市で記録があるだけであったが、今回、宇都宮市の人工の池で生育が確認された。この池では、錦鯉などが飼われているため、池底には泥が溜まっているが、ほぼ毎日一定時間注水されるため、ある程度水質や水温が保たれ、8月にも池縁の岩などに藻体が観察されている。人工的な環境にも生育が確認されたため、同様の池などの調査を進めているが、濁りの少ない池はほとんどなく、新たな生育地は見つかっていない。

カタシャジクモ

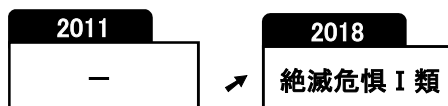


日光市
撮影：富永 孝昭

本種は、かつて中禅寺湖の記録があったものの、近年の調査では見つかっていない。今回の調査で、ほぼ50年ぶりに生育が確認された。しかし、採集された量が少ないこと、採集された深さが浅いことなど、かつてのようなシャジクモ帯を形成している状態ではない。

地衣類

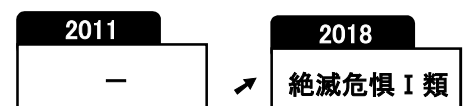
ニセトゲヨロイゴケ



日光市
撮影：原田 浩

Takahashi et al. (2012) によって日本新産として、神奈川県・山梨県・高知県から報告されたカプトゴケ科の葉状地衣。栃木県内からは、2016年に日光市霧降滝上流の溪谷で初めて見つかった(未発表)。個体数もごく少なく、絶滅の可能性がある。

コナキクバダイダイゴケ

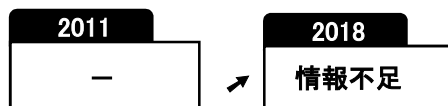


塩谷町
撮影：小澤 武雄

急な崖の岩上に生育する鮮やかな橙色をした地衣類。日本では栃木県塩谷町佐貫観音と長野県上田市の2か所から、2012年に日本新産として報告された。生育地は凝灰岩の岩壁で、他の多くの岩上生地衣類、蘚苔類、維管束植物とともに生育している。また、この地域は自然環境保全地域にも指定され、保全されているが、岩の風化が著しく崩落による消失等に伴う減少や絶滅が危惧されている。

菌類

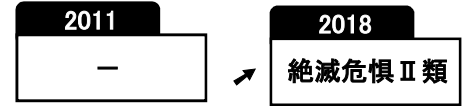
ヤマドリタケ



鹿沼市
撮影：野澤 純一

本種は針葉樹林の地上に発生し、写真はモミ林地上に発生したものを採集したものである。傘の表面は赤味を帯びた茶色でやや光沢があり、縁は白味を帯びる。傘の裏面には管孔があり最初は白色、後、黄からオリーブ緑色になる。柄の上から中ごろまでに比較的粗い網目模様があり、色は白色からベージュ色で下ふくれとなる。採集地は鹿沼市の亜高山帯である。

オオシャグマタケ

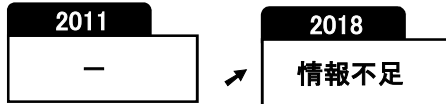


日光市
撮影：緒方 光明

写真は日光市の亜高山帯、落葉広葉樹林内腐植土上に発生したものである。本種はシャグマアミガサタケより大きく、脳状の頭部は凹凸や皺がシャグマアミガサタケより細かく、黄から赤褐色である。柄は太く円柱状で縦じまがあり、類白色かややクリーム色となる。胞子に顕著な網目状の紋様があり、両端に突起がありシャグマアミガサタケと区別できる。

● 変形菌類

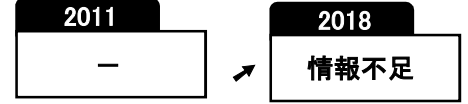
イボススホコリ



那須町
撮影：松本 淳

那須町で、東アジアからは初めて採集され、2012年に公表された。これまでに、ドイツ、オランダ、フランス、オーストリア、ルーマニア、ウクライナ、ロシアから報告がある。落葉広葉樹の倒木上で長径4 cm以上になる大型の着合子嚢体を形成する種である。その後も、東アジアの他の地域からは確認されていない。世界的にも発見例が少ないため、生育条件は不明な点が多い。今回新たに情報不足に選定した。

ハルカミノケホコリ

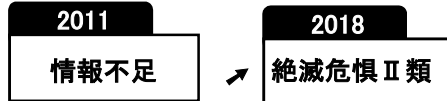


那須町
撮影：松本 淳

那須町で、アジアからは初めて採集され、2012年に公表された。これまでに、アメリカ合衆国・スペイン・フランスから確認されている。雪線付近の倒木上で子実体が確認されたことから、積雪の下で生育する特異的な生態をもつ好雪性種と考えられる。その後もアジアの他の地域からは確認されておらず、世界的にも発見例が少ないため、生育条件は不明な点が多い。今回新たに情報不足に選定した。

● 哺乳類

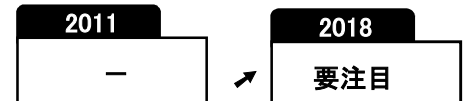
ヤマコウモリ



宇都宮市
撮影：安井 さち子

ヤマコウモリの記録は、これまで県内では奥日光の森林での捕獲記録がわずかにあるのみであったため（宮野、未発表）、改訂版（2011）では情報不足とされていた。今回の調査により、新幹線高架橋で本種の冬季のねぐら（日中の休息場所）が2地点で確認された。確認されたねぐらが平地の人工建造物にあるため環境改変の可能性があることや、樹洞棲の本種が人工物を使うのは樹洞の不足の可能性も考えられることから、Bランクと判断した。

ニホンイタチ



那須塩原市
撮影：近藤 慧

西日本では、生息環境の悪化と生息環境が競合する外来種（シベリアイタチ）の生息域の拡大によって、本種の個体数減少が懸念されている。これを受け、IUCN（国際自然保護連合）レッドリストでは、軽度懸念から準絶滅危惧にランクアップされた。現在、本種は県内に広く分布するものの、個体数は少ない。また、生息環境の競合する外来種であるミンクが県内で確認された他、主たる生息環境である農耕地等の都市化も懸念される。今後の動向に注目する必要があることから要注目と判断した。

● 鳥類

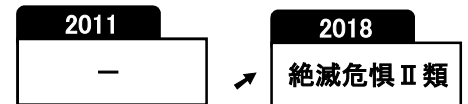
ノジコ



日本野鳥の会栃木提供

ノジコは、前回までの調査により、県内の低山や山地の沢沿いのハンノキ林やヤナギ林、崩石土の上に低木が生えた環境に局地的に生息し、個体数も著しく少ないことが明らかになっていた。今回、今まで繁殖期の代表的な生息地として知られていた横根山や小百川沿いで生息が確認できず、生息状況がさらに悪化していることが明らかになった。そのため、Aランクにランクを上げた。

タカブシギ

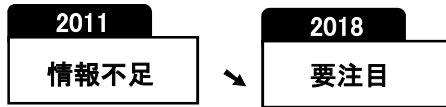


日本野鳥の会栃木提供

タカブシギは、ユーラシア大陸北部高緯度地域で繁殖し、日本では春秋に立ち寄る旅鳥である。県内では平野部の河川や湿地、水田などにおもに秋に渡来する。1980年代までは普通に渡来しており、数十羽から百数十羽の群れが見られることもあった。しかし近年では、数羽が稀に観察されるにとどまり、渡来数が激減した。このように生息状況が極めて悪化していることが明らかになったため、ランク外から新たにリストに加え、ランクもBランクとした。

● 爬虫類

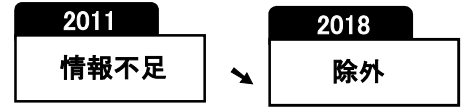
シロマダラ



那珂川町
撮影：林 光武

シロマダラは、生息情報が限られていたため、前回のリストでは情報不足とされた。今回、これまでに蓄積された調査データから、平野部から山地まで県内に広く分布していることが明らかになった。ただし、生息密度は低いと推測され、餌となるトカゲ類の生息状況が悪化していることも考慮すると、生息状況について引き続き注意深く見守る必要があるため要注目にランクを変更した。

ニホンイシガメ

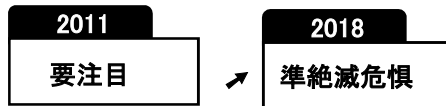


佐野市
撮影：青柳 育夫

ニホンイシガメは、生息確認記録が極端に少ないため、前回のリストでは情報不足とされた。今回、県内で採集された複数の個体のDNA分析を行ったところ、すべて西日本等の県外から持ち込まれて野外に放された個体あるいはその子孫である可能性が高いことが明らかになった。生息情報が極端に少ないことも考慮すると、本県には在来のニホンイシガメが生息する可能性は非常に低いため、今回リストから除外した。

● 両生類

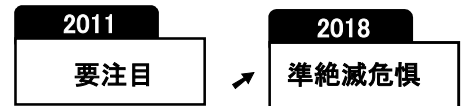
クロサンショウウオ



那須塩原市
撮影：林 光武

クロサンショウウオは、前回までの調査により、県内の分布は県北西部の山地の湿地周辺に限られており、繁殖地点数は多くないことが明らかになっていた。今回、塩原地域の複数の大規模繁殖地で、近年渇水の年が多くなり繁殖状況が悪化していることが確認された。また、奥日光や那須山地の繁殖地でも渇水状況が確認された。このように、繁殖地点数が多くないうえ、主要な繁殖地の一部で環境の悪化が認められたためCランクにランクを上げた。

アズマヒキガエル

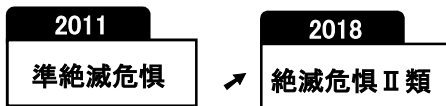


塩谷町
撮影：林 光武

アズマヒキガエルは、前回までの調査により、県内では山地（高地）には普通に生息するものの、平野部や丘陵部（低地）では減少傾向にあることが明らかになっていた。今回、低地における減少傾向がさらに進行し、以前は多数の個体が繁殖した地点の多くで繁殖が確認できない、あるいは、少数個体しか繁殖しない状況に変化していた。本種は高地と低地で体サイズや体色の特徴が異なり、種内の多様性を維持するうえで低地産の重要性が高いためCランクにランクを上げた。

● 魚類

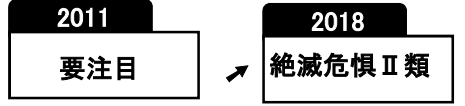
キンブナ



真岡市
撮影：石川 裕之

栃木県版レッドリスト（第1次）公表時に生息が確認された地域でも個体数が極めて少なくなり、成魚は確認されるが幼魚は見つからない状況が見られる。河川改修や土地改良事業等により河川と水田とのネットワークが分断される場合があり、生息はできるが産卵ができないような環境下で生息しているため、近い将来更なる個体数の減少が考えられることからBランクにランクを上げた。

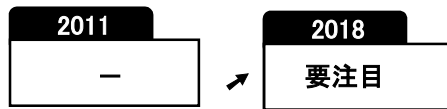
ニッコウイワナ



日光市
栃木県水産試験場

本県では主に県西・県北地域の山間部に生息しているが、放流されたアメマス系統のイワナとの交雑が進み、在来個体群の分布は局限されているものと推定される。また、これまでに確認されている生息地の多くで河川工物物による分断化が進んでいて、遺伝的多様性の低下による絶滅のリスクが高まっていると考えられることから、Bランクにランクを上げた。

ニホンウナギ

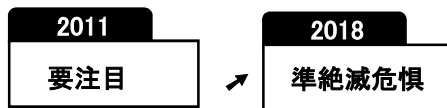


撮影：石川 孝典

ニホンウナギについては、国のレッドリストにおいても生態に関して不明な部分が多いことから情報不足（DD）と判断されていたが、近年の研究から河川へ遡上する個体が産卵に大きく寄与していることが確かめられ、第4次レッドリストにおいて絶滅危惧 I B 類（EN）に変更されることとなった。本県に遡上する成熟個体数の総数及びその動向は不明であるが、要注目に位置付けて生息状況の変化を注視していきたい。

● 甲殻類

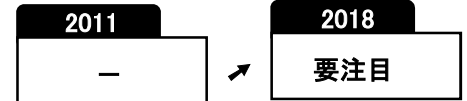
ヌカエビ



真岡市
撮影：石川 裕之

ヌカエビは、ヌマエビと混同されていた在来種であり、前回のリストでは要注目であった。しかし、外来種カワリヌマエビ属が2011年から県内で確認されており、競合によってヌカエビが減少する可能性が指摘されている。県南ではカワリヌマエビ属が多数生息しているが、ヌカエビはほとんど採集することができない状況である。ヌカエビは外肢・眼上棘を持つが、カワリヌマエビ属はこれらを欠くことから同定可能である。

サワガニ

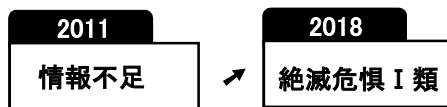


矢板市
撮影：小川 浩昭

サワガニは県内に広く分布するものの、生息密度が低い場所が多い。また、県北には広い範囲に分布するものの、県西部・北西部の山地や県南の低地における記録は少なく、生息状況はよくわかっていない。過去の情報が限られるため、減少傾向にあるのかは不明である。県内の分布情報を収集し、生息状況とその変化を明らかにする必要がある。

● 淡水産貝類

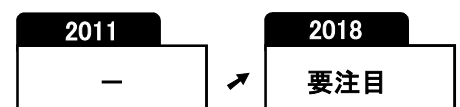
カラスガイ



栃木市産
撮影：小川 浩昭

平野部の湖沼や大河川の下流部に分布する例が多く、過去には小山市や栃木市付近で確認されている。1984年に渡良瀬遊水地の旧藤岡町赤麻地区で採集されて以来記録がない。ドブガイの大型の個体と混同されやすく、1990年代以降、生息の可能性が高い渡良瀬遊水地やその他の地域から寄せられた情報を精査しているが、確認された個体はすべてドブガイである。絶滅の可能性が著しく高まっていると判断し、Aランクにランクを上げた。

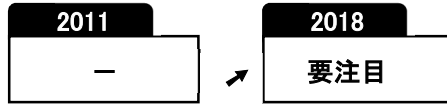
マシジミ



栃木市産
栃木県立博物館

マシジミとタイワンシジミ種群との遺伝的な関係は不明の点が多く、形態的にもマシジミとタイワンシジミを厳密に分類することが難しい状況にある。タイワンシジミ種群には、典型的なタイプであるカネツケシジミ型のほか、マシジミと類似した濃色型など多様なタイプがある。国のカテゴリー（ランク）が変更されたことや、本県においてもタイワンシジミ種群に占有されている河川が多く、今後も継続した調査が必要と考えられることから新たに要注目とした。

マルタニシ

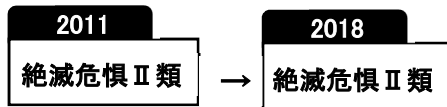


那珂川町産
栃木県立博物館

形態的に類似するオオタニシ、ヒメタニシなどで見分けることが難しいため、身近な生物であるのに正確な情報が得にくい状況にある。国のカテゴリー（ランク）が変更されたことから、本県でも継続した調査が必要と考えられることから新たに要注目とした。

● 陸産貝類

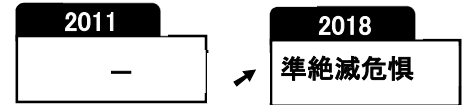
クリイロキセルモドキ



左：日光市産
右：北海道八雲町産
撮影：黒住 耐二

これまで県内では八溝山系・那須山系から本種の記録があったものの、標本は確認できていなかった。今回、県内の研究者が採集していたコレクションの中から、「田代山林道」産の標本を確認した（写真左）。この種は、活動期には苔むしたブナの樹幹で見られ、殻の表面に“ごみ”を付けて、隠ぺい効果を高めている（写真右）。県内のブナ林を歩かれる折に注意して頂き、新たな情報が得られると嬉しい。写真でも類似種と区別可能である。

スカシベッコウ

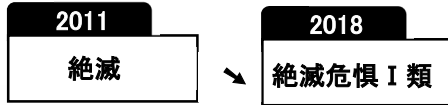


東京都奥多摩町産
撮影：黒住 耐二

「栃木県」とのみ記された記録があったものの、詳細な産地が不明であったため、リスト掲載を見送っていた。日光での調査資料中に本種と考えられる少数個体が確認できた。ベッコウマイマイ科（最近では日本産を複数の科に分割する場合もある）の小型種の分類学的な検討は遅れており、隠ぺい種が多数あると思われる。この種も7mm位で、ほとんど図示・検討されることがない状況である。自然度の高い森林の落葉下に生息する。

● 昆虫

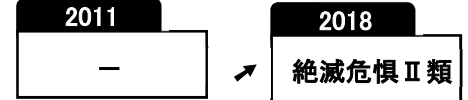
オオイチモンジ



那須塩原市産
撮影：多和田 潤治

北海道の平地～山地帯、本州（東北地方、関東地方、中部地方）の山地帯に分布するが、本州では個体数が少ない。県内では旧栗山村を含む日光市から確認されていたものの、1991年以降記録がなかったため、栃木県では絶滅種として扱われていた。しかし2015年と2016年に、那須塩原市の大佐飛山塊で吸水中の計2個体が確認された。今回の確認を受け、絶滅から絶滅危惧Ⅰ類（Aランク）に変更した。

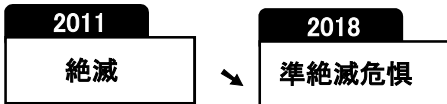
キオビクモバチ(キオビベッコウ)



宇都宮市
撮影：松田 喬

国内では本州から南西諸島まで広く分布し、西日本では比較的普通に見られるが、栃木県では極めて少ない。古い記録には近似種と混同されていたと思われるものが含まれており、確実な標本は1990年代に塩谷町と宇都宮市の鬼怒川河原で採集された3個体だけであった。しかし、最近さくら市の鬼怒川河原で生息が確認された。生息地の環境悪化や幼虫の餌であるクモ類の減少により、本県では絶滅の恐れがあるため絶滅危惧Ⅱ類（Bランク）に選定することにした。

マエアカヒトリ

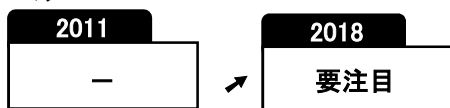


足利市
撮影：鈴木 真理恵

本種は、かつてはネギや大豆、トウモロコシの害虫として広く見られたが、1950年代頃から全国的に急激に数を減らし、栃木県では1958年を最後に記録がなく、絶滅種とされてきた。しかし、近年、神奈川県、群馬県、埼玉県などで生息確認の報告が相次ぎ、栃木県でも2016年に足利市で58年ぶりに生息が確認された。発見場所の周辺には本種の食草であるネギやダイズの畑が点々とあり、そこが発生源である可能性は高い。近県の状況からも今後、本種は農薬をほとんど使わない家庭菜園や無農薬栽培地で増加する可能性が高い。そのため、絶滅から準絶滅危惧（Cランク）に変更した。

● 土壌動物

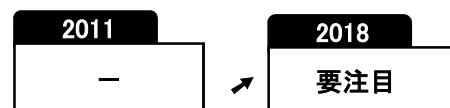
アカサビザトウムシ



青森県五所川原市
撮影：鶴崎 展巨

体長5~7mmほど。本州、四国、九州に広く分布するが、斑紋と染色体数に地理的分化が顕著。県内には、中禅寺湖周辺を境に色斑の異なる2つの地理型が分布する（南西に関東型、北東に東北型）。染色体数は、鬼怒川より西では地理型に関係なく2n=14だが、鬼怒川上流には2n=10の集団がある。それらの接点には移行帯があると予想される。年1化、卵越冬で、成体は7月頃に出現し、10月頃まで森林の草本上などに見られる。

オオゲジ



東京都千代田区産
撮影：石井 清

オオゲジは、体長約4cmに達し、触角と歩脚が非常に長いことが特徴である。1994年~1998年にかけて栃木県自然環境基礎調査が行われたものの、オオゲジを採集するのに適した調査法ではなかったため、生息の確認に至っていない。しかしながら、最近の調査では、葛生と宇都宮に生息することが明らかになった。これらの記録増加の要因は不明であり、県内における分布状況の把握と今後の分布拡大について注目する必要がある。

● 植物群落

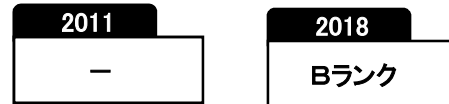
奥日光(千手ヶ原)のエゾノコリンゴ群落



日光市
撮影：逢沢 峰昭

エゾノコリンゴはバラ科の落葉小高木で、国内では北海道から本州中部の冷温帯林に見られるが、分布は限定的である。本県では2004年に奥日光千手ヶ原で分布が確認された。2015年の調査で、千手ヶ原のカラマツ林内や高木を欠く明るい林内で105個体が確認された。部分的に群落を形成しており、本県では極めて珍しい。しかし、若木にシカの被食痕が見られるなど群落の現状は不良であり、本見直しでは単一群落のBランクとして取り上げた。

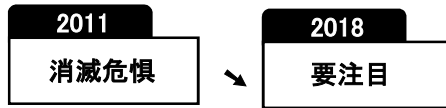
尾出山のウラジロヒカゲツツジ群落



日光市
撮影：星 直斗

ウラジロヒカゲツツジはツツジ科の常緑低木で、日本の固有種である。国内では関東地方中部に分布し、県内では足尾山地の岩場のみ生育している。園芸採取によって減少しており、現在は山地の岩場など、人手の入りにくい場所に見られる。絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律に基づき、国内希少野生動植物種に指定されており、捕獲や採取、譲り渡し等が禁止されている。本見直しでは単一群落のBランクとして取り上げた。

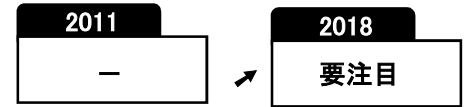
湯西川沿いの赤下風穴群



日光市
撮影：河野 重範

湯西川沿いの赤下風穴群は、湯西川ダムの建設予定地内にあり、同ダム建設の影響が懸念されていた。このことから、2005年のレッドデータブックでは消滅寸前、2011年の改訂時は消滅危惧に選定されている。2012年の試験湛水および運用開始以降、概ね常時満水位を境として、標高が低い位置の風穴は水没により消滅した。しかし、2016年夏の調査では、常時満水位より上の斜面で冷気を出す複数の風穴が確認された。したがって、赤下風穴群の消滅は回避されたと判断される。残された風穴群は学術的に重要であり、今後も注目すべきであることから、要注目にランクを変更した。

龍門の滝、馬門の滝



那須烏山市
撮影：河野 重範

那須烏山市の龍門の滝と茂木町の馬門の滝は、喜連川 - 益子丘陵に位置する。龍門の滝とその付近の滝を対象にした近年の研究例によれば、これらの滝付近には中新世に堆積した中川層群の火砕岩などが分布し、侵食に弱い下位の層を削り込んで落差をつくるとされている。日光地域の火山活動によって生じた滝とは明らかに成因が異なることから、要注目として選定した。なお、喜連川 - 益子丘陵では、これら以外にも同様の成因と考えられる複数の滝が確認されている。